

新刊紹介

小嶋菜温子・長谷川範彰編

『源氏物語と儀礼』

大竹 明香

本書は、先に刊行された『王朝文学と通過儀礼』（竹林舎）の発展として企画された、全八〇六頁にわたるきわめて大部の書である。『王朝文学と通過儀礼』の成果を踏まえつつ、本書では、『源氏物語』と儀礼・通過儀礼に焦点を絞り、『源氏物語』における通過儀礼の諸相や主要人物に即した儀礼の語られ方を通覧することにより、作品世界の成り立ちに迫るものとなっている。本書の構成は以下の通りである。

序

幻の「源氏物語絵巻」のことなど

『源氏物語』と人生儀礼をめぐって

第一章 源氏物語における人生儀礼

◆生誕◆

生誕 方法としての産養

◆袴着◆

袴着 「蛭の子が齡」の比喩をめぐって

◆元服◆

元服 その背景にある陰陽道

◆裳着◆

裳着 紫の上の「髪削ぎ」「新枕」との関連から

◆結婚◆

結婚 「宿木」巻、落葉宮の代作歌に着目して

◆算賀◆

算賀 光源氏四十賀と朱雀院五十賀の相違を中心に

◆葬送◆

葬送 『西宮記』との比較から

◆法会◆

法会 『落窪物語』の法会との対比から

◆落窪物語・うつほ物語から◆

源氏物語における儀礼

◆平安後期物語との比較◆

平安後期物語との比較

◆源氏物語古注釈から◆

『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『狭衣物語』と「りかへばや」との通過儀礼

変遷

◆江戸期の古典学から◆

儒学と堂上古典の邂逅

『源氏外伝の説く「源氏物語」理解を端緒として

第二章 源氏物語の人々と儀礼

◆帝◆

帝の葬送儀礼 桐壺院の「御国忌」をめぐって

◆后妃◆

『源氏物語』后妃の儀礼

◆光源氏◆

「さかさまに行く」儀礼 算賀の宴の時空間

◆紫の上◆

紫の上をめぐる儀礼 儀礼の対象および主体という観点から

◆玉鬘◆

玉鬘の儀礼 紫の上の儀礼の反照として

◆夕霧◆

夕霧の通過儀礼 雲居雁との結婚を中心に

◆明石の君◆

御湯殿の儀の明石君

「若菜上」巻における明石の町の生誕儀礼をめぐって

◆女三の宮・落葉の宮◆

『源氏物語』女三宮の裳着と機能
姫君たちの裳着の場面に着目して

◆柏木◆

柏木と通過儀礼

◆薫・匂宮◆

『源氏物語』「宿木」巻における二つの結婚
薫と匂宮の社会的身分と相互意識

◆中の君◆

中の君 秘密裏に結ばれた腹帯

◆浮舟◆

浮舟と儀礼（奪われた）婚礼ということ

第三章 源氏物語と儀礼の歌

◆源氏物語にみる儀礼の歌◆

『源氏物語』の儀礼と歌

明石姫君誕生の儀礼と和歌

玉鬘裳着の日の歌 『源氏物語』における儀礼歌の問題

源氏物語の儀礼と和歌 裳着を中心に

『源氏物語』の「後朝の別れの歌」と

「後朝の文の歌」

源氏物語における儀礼の歌

◆儀礼歌の歴史からみる源氏物語◆

儀礼と抒情 和歌の機能

『源氏物語』からみる儀礼歌の表現史

裳着の和歌と『源氏物語』

葬送儀礼関係歌の流れから見る『源氏物語』

物語

時を経た哀傷歌と『源氏物語』

幻巻を読む 儀礼歌としての屏風歌の視点から

巻末資料

『源氏物語』人生儀礼歌一覧——付・八

代集にみる参考歌

第一章から第三章までを紹介していく。

まず第一章では儀礼・通過儀礼とは何か、

『源氏物語』に語られている通過儀礼とは何かを明らかにしていく。生誕から袴着、

元服、裳着、結婚、算賀、葬送、法会までの通過儀礼を、それぞれについての解説や

『源氏物語』に語られる叙述を照らし合わせ論述されている。また、『源氏物語』と

『うつほ物語』『落窪物語』などの他の王

朝文学作品を比較・対比し、『源氏物語』における通過儀礼の語られ方の特質などを論述している。さらには、『源氏物語』の通過儀礼を古注釈や江戸期古典学の解釈から考える。

第二章は、『源氏物語』の作中人物それぞれの通過儀礼の描かれ方を浮き彫りにし、それらをとおして見えてくる人物造型などを明らかにする。光源氏や紫の上、玉鬘、夕霧、薫、浮舟などの主要な作中人物の通過儀礼は、作中時間や政情、それぞれの事情などによって描かれ方に異なる点がある。これらを踏まえつつ、『源氏物語』の主題を論及している章であるともいえる。

第三章は、『源氏物語』の儀礼歌から作品世界がどのように成り立っているのかについて迫るものである。通過儀礼は子の誕生や成人、結婚などの人生の節目に行われるものである。この大切な節目に際して、作中で詠まれる和歌や和歌をともなった場面から、それぞれに特徴的な表現や歌語などに着目し、論証されている。

本書は全編をとおして通過儀礼を軸とし、作品世界の表現や成り立ちを明らかに

するものであるが、そもそも作中において主要人物の全ての儀礼が語られているわけではない。例えば、光源氏は作中において産養は語られておらず、また光源氏の子（表向きは桐壺帝の子）冷泉帝や、一人娘である明石の姫君（後の明石の中宮）も産養は語られない。（五五七頁）これらは意図的に語られないのであり、むしろ語られないことが、作中世界において大きな意味を持っていることに気づく。また語られている場面もそれぞれの抱える事情が反映された描かれ方が多く、それは作品が示すそれぞれの人物を描く際の方法であることがわかる。このようにして通過儀礼が語られることと語られないことから、『源氏物語』の主題を浮き彫りにしている。

さらに、巻末資料として『源氏物語』人生儀礼歌一覽——付・八代集にみる参考歌』が掲載されている。こちらにも、『王朝文学と通過儀礼』（竹林舎）に収載されている『源氏物語』通過儀礼一覽』を基礎とするものであるという。項目は、左記の通りである。

生誕
成人

婚姻

賀

出家・葬送

『源氏物語』作中の儀礼歌を分類し、八代集からそれぞれの儀礼に関して詠まれた和歌が参考歌として併記されている。各項目に三首程度の参考歌があげられており、『源氏物語』の儀礼歌と比較しながら、儀礼歌に用いられる歌語や表現などの特徴に析れることができる。

本書は、『源氏物語』において語られる儀礼の描写が意味するものと、その描写の中で詠まれている儀礼歌について丹念に分析されている。諸論が儀礼に軸をおいて『源氏物語』を論証しているため、通読することにより、儀礼の意味や儀礼がどのように語られているのか、さらには作品世界の全体像及び骨格が浮かび上がってくる。ぜひ多くの方に読んでいただきたい。（二〇一〇年一〇月・武蔵野書院・A五判・上製函入・八〇六頁・本体一八、九〇〇円）
（おたけあかり 大学院前期課程在学学生）

小嶋菜温子・倉田実・服藤早苗編

『王朝びとの生活誌』

——『源氏物語』の時代と心性』

泉屋 咲月

『源氏物語』を読み解くには、その時代背景や当時の人々の精神的傾向をふまえることが不可欠である。本書は、多角的な討究によって、王朝時代における、現代とは違った社会事情やそこにおける心の実態を詳らかにすることを目的とするものである。以下に概略を記す。

王朝びとの生活誌へ―序にかえて

王朝の生活誌をどうとらえるか―歴史と想像力の交差する場へ―座談会（小嶋菜温子、倉田実、服藤早苗）

I 宮廷空間とジェンダー

童女御覽の成立と変容―平安王朝五節儀のジェンダー眼差し 服藤早苗

『源氏物語』の後宮と密通 高橋亨